

氏 名：光 橋 さおり
学位の種類：博士（看護学）
報告番号：甲第96号
学位記番号：博第94号
学位授与年月日：令和2年3月17日
学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当
論文題目：はじめて教育職に就いた看護系大学に所属する助教の経験：
職業的アイデンティティに焦点を当てて
Experiences of Novice Assistant Professors: Focus on Professional Identity
論文審査員：主査 小 宮 敬 子
副査 佐々木 幾 美（正研究指導教員）
副査 川 名 る り（副研究指導教員）
副査 三 浦 英 恵
副査 西 田 朋 子

論文審査の結果の要旨

近年の看護系大学の急増によって看護教員が不足し、教育の担い手として大学院博士前期（修士）課程を修了後に看護系大学教員となる者が増えている（日本看護系大学協議会, 2018a）。看護系大学に所属する助教の場合、任期制の雇用もあり、看護教員として職業を継続する者ばかりではなく、職業継続に迷う者もいる。海外の先行研究では、臨床看護師が看護大学教員への移行として「予期・期待」、「方向感覚の喪失」、「情報探索」、「アイデンティティ形成」の4段階を経る（Schoening, 2013）ことが明らかになっているが、これは看護系教員として職業継続している准教授等を対象にした研究であり、看護系大学に所属する助教の場合、異なった経験をしていることが考えられる。本研究は、はじめて教育職に就いた看護系大学に所属する助教が、看護系大学入職後どのような経験をしているのか、特に助教の職業的アイデンティティ形成に関わる経験に焦点を当てて明らかにすることを目的としている。これまでの先行研究では、看護師という職業的アイデンティティや看護教員という職業的アイデンティティに特定して、その職業と自己との統合状態を明らかにしているが、将来のキャリアが必ずしも特定されていない助教の場合、職業的アイデンティティが揺れ動く経験をしている可能性があると考え、自己の現在の職業に対する知覚や自己への位置づけに焦点を当てて、彼らの経験を明らかにしている点が本研究の独自性である。

研究参加者5名はすべて任期付きの助教であったが、看護系大学の教員を継続していくことを決めた者、看護師として臨床に戻ろうと決めた者、行政職という全く異なる進路を選択しようとした者というように、彼らが考えている今後の進路は様々であり、各々のそこに至る経験が職業的アイデンティティの視点から生き生きと記述されている点が評価された。すべての参加者が看護師という強固な職業アイデンティティとの比較で、大学教員という職業を捉えており、病院という組織と大学という組織との違いに困惑しながら、各々が大学という職業集団のもつ価値体系をどのように内在化していくかという過程を明らかにしたことも本研究の特徴である。教員としての主たる役割である「学生に教える」という経験が、教員という職業的アイデンティティの形成には重要であるが、研究者としてのアイデンティティを形成していくことは難しい課題として捉えられていることが示され、改めて研究活動への支援が重要であることを指摘した。ほかにも、看護系大学初任者に対する支援システムとして、見えにくい看護系大学教員の役割や職務に対するオリエンテーション、新しい職務に対する個別の面接の機会の充実などを提案するとともに、大学院での教育課程において、看護系大学教員の役割や職務を知る機会を積極的に得る機会を提供する必要性を示唆しており、看護学教育における教員の育成に貢献する研究であると評価された。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。